

伝統と、挑戦と

河 合 育 子

卓球の伊藤美誠選手は回転を掛けにくく使いにくいという常識の〈表ソフト〉ラバーを敢えて使いこなすことで飛躍的に強くなったという。奥村氏の第十七歌集『八十一の春』を読みながら、伊藤選手の〈表ソフト〉効果を思い出した。

鳥たちの頭小さい 鳩見ても体に比べ頭小さい

人体は水の袋であるけれど健康体は水漏れしない

縄文の時代の土器は縄文が無くとも縄文土器と呼ばれる

短歌として脆弱になりやすく使いにくい散文的文体（表ソフト）を生かす奥村氏ならではの発見の歌三首。一首め、「頭小さい」の助詞省略表現の反復が実に効果的で、見ながら見えていなかった鳥たちの小さな頭が突如として迫力ある大写しとなり、すいっとその体に吸いついていくような不思議な感覚になる。発見を歌に結晶させ、発見の驚きを意味だけでなく感覚としても読者に伝える、文体とリズムの詩的マジックだ。読者は発見に目を見張り、驚きと感動を共有する。

二首め、三句の接続が絶妙で、先へ先へと一気に歌を読ませ読者を引き込む。発見を哀感なくからりと歌うことで、人間という生物への愛しさがにじむ。眩くような文体から奥村氏の声が聞こえるようだ。散文的文体だからこそ、発見に実感としみじみとした余情が生まれる。三首め、奥村氏の真骨頂が発揮されている見事で鮮やかな発見の一首。永遠に少年のままざしをなくさない奥村氏ならではの発見の魅力が散文的文体によりさらに鮮やかさを増している。さらに四句から五句への句跨がりです器の重み、濁音の多さでごつごつした土器の手触りが伝わる。

三首とも、意味に添った韻律の巧みさ、確かな描写力が文体を支えている。熟練の歌人のゆるぎない技術に支えられて、文体の散文性が一度読んだら忘れられない爆発的なインパクトに変換される。永遠の少年であり、高度な技術を自在に駆使できる熟練歌人だからこそできる〈表ソフト〉散文的文体を生かした高速ドライブが炸裂している。発見を独自の詩に結晶させるため如何に歌い、如何に表現するか。歌人の思索と選択がそこにある。

夏の陽に照らされて重きみずからを下ぐる
ゴーヤの緑鮮し

幾日も空高く咲く紫の皇帝ダリア惜しみつ
つ見る

藤色に咲き盛る藤の花に来て蜜吸い飛ぶは
みな熊ん蜂

歌集には〈表ソフト〉ドライブの鮮やかな作品に対し、コ
ントラストの際立つ文語文体の端正な歌も多数収められてい
る。歌集にその両方を置くことにより、両タイプの歌が輝き、
その相互作用が歌集の世界をさらに豊かにしている。一首め、
ひりひりするような夏の強い陽の中で下がるゴーヤの実の
瑞々しい質感と重みが二句の8音とイ音の眩しさで美しく描
写されている。とりわけミ音の柔らかな重なりが美しく、結
句の視覚的表現がより一層胸に届く。二首め、イ音の踏韻が
柘二のひたむきで孤高なイ音の踏韻に重なるような格調高さ
だ。皇帝ダリアの生命力を、言葉による描写だけでなく韻に
よっても鮮やかに描写している。奥村氏は〈表ソフト〉散文
的文体を生かす高速ドライブを取り入れる一方、その師・宮
柘二からの伝統を確かに受け継ぎ、展開させていることがよ
くわかる。三首め、二句めの8音が藤の花の量感を思わせ、
濃厚な香りが漂ってくるようだ。柔らかなハ行の重なりが咲
き誇る藤の花そのものであり、重なる濁音から、熊ん蜂の羽
音が聞こえてくる。きっちりとした描写と韻律の力で藤の花
の咲く空間を一首の中に立体的に切り取っている。

伊藤美誠選手は〈表ソフト〉を使いこなすため猛烈な練習

をこなしたという。そして〈表ソフト〉効果を生かすための
《裏ソフト》一般的に多用される回転を掛けやすいラバーの
使い方が独特だという。奥村氏が〈表ソフト〉散文性を生か
せるのは《裏ソフト》韻律性と表現力がその根底にしっかり
とあるからだ。伝統を汲んだ確かな力が、韻文である短歌で
散文性を生かすという常識を覆す挑戦を成功させている。

歌集『八十一の春』の巻末、平成じぶん歌の章は平成の一
年一年を共に振り返り、時代を共有できることが興味深く、
ひとつの時代の記録としても後世への大きな意味を持つた
う。

トランポリンのごと跳び上がる歩行者を一
月十七日早晩に見つ (阪神・淡路大震災)

地下鉄のホームに降りるを止められてサリ
ン事件とテレビで知りぬ (三月二十日)

平成七年の二首を引く。地震により歩行者が高く跳んで見
えたニュース画像がまざまざと蘇る。不気味な地鳴りのよう
に才音が響く。二首め、地下鉄サリン事件の日、奥村氏はま
さに階段を降りて地下鉄に乘ろうとしていたのだ。緊張感と
リアリティ。すさまじい事実の力と重みに圧倒される。

独自の歌世界を確立する者は、傷つくことを恐れずに荒野
を一人開拓する勇者だ。奥村氏は常識を覆す〈表ソフト〉散
文的文体を生かし、文体の脆弱さを《裏ソフト》短歌の伝統
を汲む技術で補い、唯一無二の世界をさらに深めた。永遠の
少年奥村氏は荒野をゆく勇者でもある。そして勇者はまた、
荒野を走り続けてゆくのだ。

舞い降りる鶴のように

吉 田 史 子

『風の鶴』は桜井千恵子さんの第三歌集である。二〇〇七年から二〇一七年までの十一年間の作品を収める。第二歌集の『風語』はご主人が急逝されたところで終わる悲痛な思いのこもった歌集であった。その後の十一年間という時間が作者の上にどう過ぎたのか。まず歌集中から亡きご主人のことを詠んだ作品を見てみたい。

男傘^{をがさ}さへ幸せなりし日の形見ひらけば深く
夫に領さる

われを叱るただいちにんのありしこと心に
沁みて冬の雨降る

青年の君に従ひ来し渚 夜光虫見し夏もあ
りたり

六歳と二歳がわれを奪ひ合ふこんな幸せ亡
き夫は知らず

きつね雨身に浴びて立つ春の野辺われの標^{しめ}
野に君降^おりて来よ

一首目はご主人の使っていた男物の傘のことであろう。大きく重い傘はひらくと包みこまれるような温かい安らぎがあ

ったのだろう。身の周りのあれこれが時を経てご主人を偲ぶよすがになるのだ。二首目、深く認め合っている夫婦だからこそ真剣に叱ってくれるのである。もう叱ってくれる人はいない寂しさがひたひたと心に沁みてくる。『風語』に「ほめ上手しかり上手の夫なりき浅慮のわれを育てくれにき」がある。三首目、青年時代の思い出の場所である七ヶ浜。東日本大震災のことは直接表されていないがすべてが過去形であることに言いしれぬ哀しみが漂う。四首目、健在であれば二人の孫はおじいちゃんを取り合ったであろう口惜しさ。今現在が幸せであればあるほど、夫にも味わってほしかったと思うのである。五首目は額田王の「あかねさす」の歌を下敷きにしていると思われる。ご主人が亡くなって六年、夫に対する思いは日常生活の何気ないことをきっかけに裡からほとばしり出てくる。それは作者にも止められない情動なのだ。

作者は宮城県多賀城市に住む人、この歌集の二〇一一年にはまだ記憶に新しい東日本大震災が存在する。作者によると作品四七五首のうち一三八首が震災を詠んだ歌だという。作者の住む地域は内陸部だったので津波被害はなかったものの、

ライフラインの寸断に苦しめられることになる。

電気ガス水道止まり冷えまざる暗き器がわが家であるよ

母はわれに我は子に子は孫たちに食べさせたくてまた譲り合ふ

清潔も不潔もあらずわづかなる水にて日々の炊事を済ます

不可思議の力生まれて今われが左右に提げ
る十リツトルの水

水汲みに行かなくていい今日からは蛇口を
進まる水のががやき

遊びつつ心の傷を癒すらし地震ごっこ津波
ごっこ繰り返す児ら

震災の歌から六首をあげた。義母と実母、子と幼い孫の家族を支え、奮闘する作者の姿が描かれる。買い物や給水に何時間も並び、炊事に頭を悩ませ、幼い孫たちを守ろうとする作者。集中には悲惨なばかりでなく、こんな歌も挟み込まれている。「何かしら清らかだった わづかなる水を貰ひて暮らしし日々は」。ライフラインが復旧するまでの日々は生きることの根源に触れる体験の連続だったのではないか。もちろんそのような体験はしなくて済ませたいのだが。作者は家族、友、小鳥、そして積まれた瓦礫にも深い思いを寄せ、歌を詠んでいる。被災した人たちの多くがこの震災を表現する言葉を見つけれないでいた時、作者の詠んだこれらの歌は一家族の震災の記録として、また被災地の人たちの気持ちを

伝える声として貴重なものである。

一年後に詠まれた次の歌には誰もがうなずくであろう。記憶にも残らぬほどにささやかな春の一日になるはずだった

震災の後、作者は二人の母を見送る。

実母よりはるかに長く同居して料理も世事も義母に習ひき

六十六年そばにゐてくれてありがたう母の
遺影に一人向く秋

作者にとって短歌はどのようなものなのか。義母に実母にも距離の取り方に悩んだ時もあったに違いないが、いつでも短歌は作者の伴走者として共に在った。穏やかなこの二首を讀むと「詠むこと」、「詠み続けること」の力を感じる。

作者の歌は定型を外れず端正な姿を持つ。難しい言葉を使うこともなく、時に古風で時にユーモアに満ち、いつもどこかしら寂しさがつきまとう。読む者の心にすっと入って来ていつの間にか忘れられない存在になっている。

歌集の題になった巻頭歌「身ぢからを尽して舞まひし雄をの鶴の終の羽搏き風中に踊つ」を讀み、インターネットで鶴の写真を検索してみた。その中で目にとまったのが舞まひ降りた時の鶴の姿である。実は鶴は降りる時に一番慎重で勇氣がいるのではないのだろうか。長い足に力が込められているように見える。細く優雅な身体だが力強さがある。舞まひ降りるからこそ、また飛び立つことができるのだ。孫たちの成長を見守りながら、これからも強く生きる作者の姿を重ねてみた。

ことばと戦いつづける人

宮崎 小夜子

『橋の裏側』は江崎昌子氏の第二歌集である。二〇〇二年より二〇一八年十二月までの四二六首を収め、影山一男氏の選にて出版の運びとなった。歌集発刊について「あとがき」に次のように記されている。

「『癌』です。いきなりの宣告。そういうことかと妙に納得している自分がいました。そして急かされるように第二歌集の上梓を思いました。」読む側の私に衝撃が走ったことは言うまでもない。一九六六年十二月「コスモス」に入会以来五十二年間、一回の欠詠もなく投稿を続けてきたという。

音楽と短歌を一つのものとして考えるのは、あやういと思うのだが、西洋音楽で私はず選ぶとすれば、バッハの「マタイ受難曲」である。音楽であつても、短歌であつても心にひびく精神の力というものは、一緒ではないかと思つている。作者は自分自身の短歌人生に於て、今という時間を自己完成のために目いっぱい使いたい、そんな思いで第二歌集の上梓を思い立ったのではないだろうか。

白き石白く濡らして黒き石黒く濡らして雨
の降りつぐ

庭の面にだれか居るらし砂利石を踏む音の
してその音動く
目に見えず汚染をされてゐることのしーん
と 遼^{ちやう}し三月の空

各分野ごとに抄出し、私の心に残った作品への想いを、可能な限り綴りたいと思う。一首目、雨の日に出会った石の存在を、白、黒というシンプルな色で提示し、自然の事象を視覚で訴えてくる。二首目、作者の研ぎ澄まされた聴覚が、人の気配をつと感じとり、砂利石の動きに気づく。結句「その音動く」に作者の心揺らぎが見え、単純なようで単純でない。三首目は視覚、聴覚を超えたところで三・一の一の放射能汚染を印象深く詠み、得体の知れない恐さを読み手に感受させる。このような手法は、作者の一つの特徴と言えるだろう。

確実に充ちゆくものの力もて葉陰に椿の珠
実うつくし

流さるるままに流るる一本の棒あり夕べの
寒き川面を

ここよりは落つるほかなくがうがうと滝と

なりつつ落ちてゆく水

たとえ葉陰であつても約束のごとつやつやと光り輝く楯の
実。普段目に止まることのないものの輪郭をうまく捉らえ、
実感がありおもしろい。二首目、自然をより深く見つめる作
者は、ことばと戦いつづけている人なのであろう。一本の棒
に注がれた目は、作者自身のようでもある。三首目、あるが
ままと概念のもとに詠まれているが、巧みに形象化され
ている。

自らのカルテを盗み読む夫の次第に險し文
字を追ふ眼は

ケイタイの待ち受け画面に一文字に口を閉
ざして亡き夫がある

幼児は小さき手をもて抽斗といふ抽斗の未
知を開けゆく

前掲の三首は複雑な表現をいっさい避け、言い過ぎないよ
う心掛けている。一首目、医師のカルテをじっと見つめてい
る夫に不安を覚える作者。だが大袈裟な物言いをせず、ふと
目にした一断片を描写するにとどめている。二首目、ケー
タイを開くたびに、亡き夫に出会うのだが、「一文字に口を閉ざ
して」がわざとらしくなく、ユニークな作品になった。三首
目、好奇心旺盛な幼子の様子が的確に詠まれている。「未知
を開けゆく」というのは、幼子にとつて最も大切な時間であ
り、優しくふくらみのある表現が味わい深い。

大声に念を押すごと物言ふはわれと同じく
教師なりしか

隅に坐る性癖今も変はるなく隅なる椅子に
来て坐りたり

ひそかなるよろこびとして蛞蝓に塩をふり
かけ眠りにつけり

一首目、何らかの会合で出会った人であろう。初句から三
句までの表現が妙に生々しく、教師の性を言い得ている。二
首目、生まれ持った性は、運命共同体と言つても良いだろう。
いつも隅に坐る作者であるが、きちんと見るべきものを見て
いる人である。三首目、このように茶目つ気のある作者。人
生の喜怒哀楽を要約することの出来る澄明な自我を供えた、
感覚派の歌詠みと言える。

本集を読み、高野公彦著『地球時計の瞑想』に、良いこと
ばがあつたことを思い出した。「人間の生命は最初から〈死〉
を内包してゐる。〈生〉と〈死〉は相対立するものではなく、
別々のものではすらない。」という件である。江崎昌子氏の
『橋の裏側』は、正にこの言葉を理解するために編まれた、
私のための歌集かも知れない、そう思った。

橋の下舟でゆきつつ自づからわれは仰げり
橋の裏側

わたくしの賞味期限は過ぎたれど消費期限
はまだまだ、まだです

表題歌と巻末近い覚悟の歌を挙げた。どちらも個性的で、
一人の人間の肉声を聞く思いがする。認識のゆとり、余裕の
視点に胸がつき動かされ、批評への触手が生まれたと思う。
作者の強い精神力に脱帽しつつ筆を擱く。

まつすぐな言葉たち

大松達知

二〇〇一年から二〇一八年の作品から三割強だけを厳選したという歌集。二〇〇七年には、長く勤めた教職を辞し、故郷の茨城県を離れ、長く単身赴任だった夫のいる静岡県に移住する。

俺たちを捨てていくんだね先生は さうだよ
よ君らを捨てて生きるの

すっぱりとこう言った（言えた）あとも、歌柄がやや広くなった感じはする。ただ、読者を笑わせようとか言葉のワザを見せつけようとする歌ではない。まつすぐに自分の一日一日を見つめて刻んでゆく。まずは自分のために地に足を付けて詠む。そもそも歌を作るとは、そのような自分のための行為なのだと再認識する。そのまつすぐな言葉たちを読者はそのまま受け取ればいい。

そう。（まつすぐさ）が小田部さんの歌の美質なのではないか。（もちろん言いたいことをまつすぐに伝えるにはかなりの修練が必要だ。）それは感情の変化から目を逸らさないことにつながる。例えば「さびしい／さみしい」という言葉をそのまま使った歌がいくつあかる。

垂直が水平になるやすらぎのさびしかりけり人も梯子も

咲き闌けて花つぎつぎとうつむきぬ向日葵

はみな後姿さびしき

さみしいか故郷はなれて来しは、はのおしやべりおしやべり止むことがなし

一首目。人間は何かしらの目的を持って立つ。動作をし、人と関わる。横になることは一種の安らぎではあるものの、いわば必要とされていない状態である。よって寂しいのであるとうという。二首目。ヒマワリは堂々と咲く。しかし、いずれ枯れ始める。時間経過の残酷さが露々になる。それは大きなさびしさである。この二首はともに、存在の影の部分に視点に向いているのもいい。

三首目は義母を静岡に呼び寄せたあとの歌。人の感情を「さみしいか」と踏み込んで詠む。初句が仮に「春の日に」などの差し障りのない語句であった場合と比べてみる。あえて「さみしいか」と言うのは相手の感情を抉るようなきつい詠み方だとわかるだろう。しかし、そこを逃げずに把握しよ

うとする。それは自身の側の感情の感度が高いからついつい言ってしまうのかもしれない。しかし自分に正直であり、自他の感情を大きく引き受ける覚悟があるからこそ発せられるのだ。まっすぐさの証左なのだと思う。

このように、いつも心の在り処を探しながら歌を作っている作者。それは、こんな歌でも感じることができると。

かなしみはしんとしづかなゆふぐれの河原

の石の陽のなごり熱

こんなにも河原の石はあたたかくこのころの底にころがってゐる

一首目。川原にあった石。その石のわずかな温もりにさえかなしみを感じてしまう。わざわざ「かなしみは」と言わなくても歌にはなる。しかし作者は、それでは読者にきちんと思いを手渡せないと感じるのだ。きつちりと「かなしみは」という強めの語が入る。それで一首の輪郭がくつきりする。言葉が遠くまで伸びてゆく。もちろんベースとして、抑えの効いたリズムがある。二首目は山崎方代の「こんなにも湯呑茶碗はあたたかくしどろもどろに吾はおるなり」の一部を借りているようだ。こちらは温かさが主役。どちらにしても、わずかな感情の変化に敏感に着目したものだ。石の温もりに心を通わせられる人。それが小田部さんなのだろう。

お芝居をしてゐる気分で紹介するホントの心はあつちに置いて

ほつとする気持ち先では、はの死をどう悲しめばいいのか分からず

義母の介護、そして逝去。それらに直面しても心の在り処を探して読者に隠さず提示する。綺麗ごとではない人間の気持ち。それを表すことで、作者の感情がある種の普遍性をもって伝わってくるのだ。もちろんそこには全ての歌に底流する突き抜けた善意と人間の悲しみへの深い理解があることが前提となっているようだ。

一村を鉈毒の湖にしづめ果て一國は建てり

明治晩年

という歌がある。十九世紀末の足尾銅山事件に取材した十首の連作の一首。これは茨城在住時代、つまり東日本大震災前である。ああ、それから百年以上たつても人災は繰り返されるのだなあと暗澹とした気持ちにもなる。かなり抑制されているけれど、かえって作者の怒りの熱が伝わる。印象的な歌だ。そしてその後、安倍政権批判の歌が何首もあり、

原発を売るにんげんの舌が言ふへ美しい日

本々だれが信ずる

途上国に道を造りに行くことはいづれは搾

取するぞといふこと

など、歌としての修辭レベルは保ちながらも「カリカリと怒つて」（あとがき）いる歌がある。これらも感情のまっすぐな発露であつて、さみしさやかなしさを述べた歌の振幅と近いところにあるのだ。

通読して感じるのは、題材はさまざまでも一首一首に宿るまっすぐな気持ちである。今後の心がどのような反応を示してゆくのか楽しみである。

命を見つめて

松尾祥子

『夜空の水無川』は、森田則子さんの第一歌集で、一九九八年から二〇一八年まで（年齢的には四十六歳から六十六歳）の作品、四四五首が収められている。養護教諭や看護師として勤め、三人の子供たちを巣立たせ、伊豆に住む両親と、知多に住む夫の両親の介護のため、三重と行き来し看取った時期の作品である。

百人の採血を終へ処置室のピーカーに挿す

しろつめ草を

頭痛薬むやみに欲しがる生徒ゐて整腸剤を

こつそり渡す

硝子戸に突つこみ耳を切りたる子われは血

を止め教師は叱る

まず仕事の歌から引いた。一首目、検診で百人の採血を終えた場面。しろつめ草はクローバーの和名であるが、血の赤を見続けた眼に、しろつめ草の白い花が優しく、殺風景な処置室を和ませる。二首目は、「スキーマの修学旅行に付き添ふ。」という詞書があり、この歌の次に「頭痛薬よく効きました」ピオフェルミン飲みし生徒がにこやかに言ふが置か

れている。生徒の様子を実によく見ている。三首目、教師との対比が鮮やかで、何よりもまず命を救うという行為に養護教諭や看護師としての生き方が表れている。

鬱ふかく死を欲る父を看にゆけり真夏の朝の（ひかり）に乗りて

楽に死ぬ手立てはないかと訊く父よ私はそれを学ばなかつた

戦地での八年間を語らざる父がこのごろ你好あなたといふ

天城路に踏採りてゐむ父はいま道英春峰信士となりて

父を詠んだ歌から引いた。一首目から三首目は、認知症と鬱病が進む父の看病に伊豆に通う日々の中で詠まれた歌で、この三首を含む「父のことば」は第五十七回〇先生賞を受賞している。一首目、新幹線の名前の（ひかり）、そして下の句の明るい表現が、上の句の重い現実をより際立たせる。二首目、看護師として命を救う方法は学んでも、死を欲する父の質問には立ちつくす他ないのだ。刃物のたぐいを隠す歌も

ある。三首目、戦争を体験した父の人生の底知れない深さを
感じさせる。四首目は九十七歳で亡くなった折りの歌。故郷
の天城路の春の情景が、懐かしく悲しい。

無駄遣ひせざりし舅が点滴を200cc残
して逝けり

二リットルの酸素ボンベは病む姑の二時間
半のいのちの重さ

仏壇に納まり故郷知多を去る義父母よ伊勢
は美し国なり

夫の両親を看取つての歌は、看護師としての眼差しが、場
面をリアルに描き出す。一首目の200cc残った点滴、二
首目の二時間半のいのちを支える二リットルの酸素ボンベ、
具体的な描写が命の重さとはかなさを感じさせる。三首目は、
義父母の故郷知多から作者の住む伊勢へと仏壇を運ぶ歌。
「伊勢は美し国なり」に、今住む伊勢を言祝ぐ気持ちだが、そ
してそこに義父母の魂を迎え入れようとする思いが籠められ
ている。

方便の五分の嘘さへ厭ふ夫その潔癖をとき
に厭へり

傍らでマツチを擦らば炎立て燃えゆく夫か
〈吉四六〉にほふ

雛には縁なきわれよ紙かぶと子に折り今は
その子に折りぬ

子の妻がそれぞれに言ふ「おかあさん」伊
勢、美濃、駿河のアクセントもつ

解きやりし首輪をすぐにはめ直すあの世で
君が迷はぬやうに

家族を詠んだ歌から引いた。夫の森田治生氏は、第六回純
黄賞受賞者である。一首目には、方便でも嘘を言わない、潔
癖で真面目な様子が伝わる。二首目は、焼酎の〈吉四六〉に
酔っ払った様子であろう。「炎立て燃えゆく」に一瞬ギョッ
とするが、ユーモアも感じられる。三首目は孫を詠った歌。
父や義父母を看取る日々にあつて、新しい命の誕生は何より
の慰めであつたろう。三人の男の子を育て、孫もまた男の子
孫に折るかぶとには、受け継がれて行く命への思いが籠もつ
ている。四首目、子の妻のそれぞれのアクセントの違いを楽
しみ、三人が育った土地をも慈しんでいるようだ。五首目は、
十六年間家族の一員だった、ビーグル犬のブラッキーとの永
訣の歌。その後もボーダーコリー、ビーグルと犬は常に身近
に居るようだ。

七千の里人が星ひとつづつもらひて眠る夜
の湯ヶ島

八月の伊豆の夜ぞらに水無川立ちて消えゆ
くいのちもあらむ

ふるさと伊豆を詠んだ歌。七千の里人が星ひとつづつもら
つて眠るとは何と美しい光景であろう。二首目は、歌集名と
なった歌。「水無川」とは天の川のこと。天の川が見える澄
んだ空を仰ぎつつ、この世を離れてゆく命を思う。このあと
作者は母をも見送る。豊かな自然、そしてそこで生まれ、ま
た還つてゆく命、森田さんはその深奥を見つめている。

静かな気づき

田中愛子

『山鳩啼く』は岡田万樹さんの第一歌集である。岡田さんは昭和四十九年にコスモスに入会された。本集には昭和五十年から平成三十年までの四十数年の間の四六〇首が収められている。もともと歌集をまとめることは考えになかったのが、お姉さまの歌が葬儀の場で読まれたことから、必ずある別れのために歌を残そうと思ったのがきっかけで歌集を出すことを決めたのだという。そして歌歴四十数年にしての第一歌集上梓となったのである。四十数年とは、負われていた子がわが子を抱く年齢に達する歳月を超える長さである。

ほしきものねだりて吾子が我の背に幼く書ける指文字三つ

笑ひ皺くつきり見せて子を抱く四十近くに
親となりし息子

岡田さんは昭和十八年の生れであるので、本集を構成するのは、作者三十代後半から七十代半ばの作品ということになる。四十年という年月の中には、大小を問わず人生の節目があったことと察せられるが、岡田さんは声高にその節目を強調しない。生老病死あるいは入学卒業といった節目を、あく

までも日々の出来事として描くことに徹しているのだ。また、節目とも言えない、短歌という詩型に収めなければ忘れられてしまうような日常がていねいに詠まれている。そこにあるのは静かな気づきである。次の二首に見るように、素材はいずれも日常のなかの些細な出来事であるが、それに気づいたことが尊く、力技で作りのあげたのではない自然に生まれたようなやさしさがある。

白金のうるこ光れり魚屋が釣にくれたる十
円硬貨

産まるるも死するも載せて回りくる小さな
町の回覧版は

また気づきといえはこのような作品もある。

母を送る炉のボタン押すをためらひて甥は
後ろをふりかへりたり

ためらつてふと振り返る。人が無意識にとつてしまう行動がそのまま描写され、葬送の臨場感が伝わる。気づきをもたらすのは鋭い感覚そしてやさしさである。

家族を詠んだ歌の中で、たとえば母を詠んだ歌。

ニラの花好きだつた母この世には修行に来
たと苦を笑ひにき

亡き母の振り出し葉のほひして夕べの路
地に足を止めたり

ここでは母の記憶が詠われている。作者が感じている母親
像は直接に述べない。ただ母が好きだつた花を提示すること
によってその人柄が伝わり、母の言葉からその生き方が知れ
る。そして母を思い出すすがに「匂い」がある。匂いは記
憶を強く喚起するゆえに、人を思い出す時のなつかしさが伝
わる。ここでも母親の記憶に対する静かな気づきがある。

不機嫌に出でゆく夫の身にふれてミントが
にほふ言葉のやうに

白シャツを青くそめつつ柿若葉きらめく下
を夫帰りくる

生きてると言ふやうに夜中に咳をする夫に
応へて我も咳する

一首目、「不機嫌に」と詠い出しながら、あとにはミント
というさわやかに香る言葉が残される。二首目、夫の表情は
言わず衣服と光景で初夏のさわやかさを伝え、三首目では夫
婦のさりげない気づかいが咳をとおして表現される。本集に
は夫あるいは夫婦のことを詠った歌は多くはない。またご夫
君の言葉や夫婦の会話はあまり詠まれていない。しかしさり
げない描写から、掲出歌のように夫婦の気づかひやむつまじ
さが静かに伝わってくる。

そしてまみえることのなかつた父。

南島の蛍となりて光りしや三十年の父の一
生

胎内の我に声かけ戦場へ行きたる二十五の
父を想ふも

三十年の生涯。終焉の地となった南の島の蛍。父親の一生
のはかなさとそこに思いを致す作者の心のせつなさが表現さ
れて悲しい。しかし、劇的ともいえる事実をことさらに強調
せず、静かな詠いぶりゆえにいつそう深く胸に響いてくる。
災害を詠うときも岡田さんの声は高ぶらない。熊本に住む
作者は先年あの地震の被害にあわれた。

観音橋わたりて二軒目わが家の地震に耐へ
し木犀匂ふ

傾きし家に下れる風鈴をからんころんと南
風鳴らす

被災したなかにあつても、作者の感覚はふとした折の木犀
の匂いや風鈴の音をとらえる。その気づきがいまの境遇に対
する静かな意志の表明であるかのようだ。

歌を作るといふことは、日常のなかにことばの神が降りて
くるのを待つことかも知れない。

花を見て雲をながめてわが裡に言葉ひとつ
の生まるるを待つ

日常とは、花を見て雲をながめて鳥の声を聞く自然のなか
にある時間であり、お碗を洗い鍋をみがく生活のなかにある
時間である。心を澄ませて、岡田さんは今日もおのずから生
まれくることばを待っているのだろう。

「歌を詠む楽しさ」とともに

坪井真里

歌集「生かされて」は正木節子ふせのこさんの第一歌集で、桑原正紀氏の選による三六一首が収められている。

あとがきに、長く教職にあつた正木さんは五十五歳で退職し、コーラスや旅行などで「第二の青春を謳歌する」なか、柏崎驍二氏の指導で短歌を始めた、とある。

おはやうと呼びかけたきほど間近くに岩手

山見ゆわが通勤路

一枚のエプロン求め足らひたり専業主婦と

ふ安らぎを得て

正木さんは盛岡市に住んでおられる。県最高峰の岩手山を詠んだ二首目は巻頭歌。作者の快活な姿が見えるようだ。二首目、責任ある仕事から解放された安堵と新生活への期待が、エプロンに託して瑞々しく詠われている。

盛岡の厳しい自然を詠んだ歌に魅かれた。

夕刊を取らむと出でし靴に入る春の雪には

ぬくもりのあり

墓石を雪の中より掘り出して菓子など供ふ

ことしの彼岸会

うど、わらび、ほんな、ふきなど味はへる
期間短し幸せ期間

北上盆地の中心に位置する盛岡は、冬季の冷え込みがことのほか厳しい。一首目、春の雪にぬくもりを感じる繊細な感覚は北国に住む方ならではのものだろう。長く厳しい冬を耐えてこそ、春は格別である。豊かな山の恵みを受けるまたとない「幸せ期間」と詠う三首目に、みちのくのやわらかな新緑が浮かんでくる。

母性あふれる歌に注目した。

子の結納すまししわれは大方の葉を落とし
たる樹木のごとし

子育てを終えた達成感と同時に体中の力が抜けるような、母親ならではの身体感覚が見事に表現されている。

育てしは男の子のみにて女の孫のなすこと

はみな新鮮に見ゆ

チャグチャグと馬に揺らるるわが少女その

名を呼べば花のごと笑む

「おばあちゃん死なないでね」と孫は言ふ

母のかはりとわれを待みて

事情は詳らかにされていないが、正木さんご夫妻は孫娘を一歳のころから手元で育ててこられた。老齢にさしかかってからの子育てを楽しんでいるような歌が並ぶ。葛藤やご苦労もあつたと思うが、何より作者は慈愛あふれる方なのだろう。これらの歌は、大切に育てた孫娘の成長記録であるとともに、祖父母との交感の記録にもなっている。

保育園の面接受けたる孫娘タンポポのやうな笑顔で帰り来

のびのびと育つた孫娘は、保母として働き始めた。

ラジオにて聴きたる（カイメツ）三日後のテレビで見たりこれぞ壊滅

わたつみに召されゆきたる金野さん短歌と野球をこよなく愛して

東日本大震災で、盛岡市内は震度五強を観測。ライフラインがストップしたため、三日後に電気が復旧するまで太平洋沿岸地域の被害のすさまじさを知ることができなかった。（カイメツ）と「これぞ壊滅」に、津波になにもかもさらわれたあの光景が、八年を経た今もよみがえってくる。

退職後に始めた短歌は、正木さんの暮らしの中で次第に大切なものとなっていく。

届きたる「コスモス岩手」を読み終へぬ自

他の命を確かむるごと

甲ひの酒ぞと夫の出しくれし梅酒のみつつ

『婦負野』を読みぬ

支部会誌「コスモス岩手」。震災でお仲間を亡くされ、短

歌はまさに生の証明であることを実感されたのだろう。二首目は、宮英子氏追悼の歌。山西省の旅を機に、正木さんは英子夫人と交流を重ねた。理解あるご夫君の心配りがなんともあたたかい。

歌集後半に、ご夫君の歌が増えてくるのが印象的だった。

わが夫をセラピー犬のやうと言ふ姪のたと

へはいつもびつたり

しちぐわつの空に浮くごと梅をとる木登り

じまんの夫七十八

歳を経るごとに夫を好きになり生かされて

バレンタインのチョコ買ふ

三首目は歌集の題名になった歌。率直な表現がまぶしいほ

どだが、「歳を経るごと」に夫婦の年輪に刻まれた喜びや

悲しみが思われて、味わい深い。

最後に自画像的作品から作者のお人柄を探りたい。

百姓の娘に学問いらぬとてつひえし母の夢

を吾が継ぐ

年越しそばおせち料理も用意して七十五歳

ぐわんばつてます

つねに積極的に全力で生きようとする作者。弱音を吐きたいときは、十代で母となった母上が心の中で励ましてくださるのだろう。「歌を詠む楽しさ教へてくれし人おほかたこの世にあらぬ寂しさ」と、歌友を偲ぶ正木さん。益々のご健詠をお祈り申し上げます。